

背皆屬陰、反舊法而用之、故建安之諸學者、悉主其說、或謂古者鑄金爲具、曰刀、曰泉、其陰或紀國號、如鏡陰之有款識也、一以爲陰、一以爲陽、未知孰是、社疑說論

〔玄同放言三〕第三十六人事 狄青が錢卜

小説に載す、桶挾間之役、信長夜謁熱田神祠、禱之曰、駿兵百萬、既陷數城、勢吞中國、士卒戰栗、不知謀所出、自非假神威以逆擊之、豈可得克、大敵乎哉、因顧軍士曰、孤欲以錢卜試雌雄焉、今所投數錢皆形カク、俗謂錢、孤必大捷、若無ナ、俗謂錢、則議和焉耳、此明神之心也、祝了、手自擲數錢於幣壇、使左右抗火視之、乃其錢皆皆面時神宮中、忽聞鳴鑼、士卒感激、勇氣百倍、信長亦大喜、明日進兵、大戰于桶挾間、一舉獲敵將義元首級、蓋信長好詭計、竊用兩面錢獎士卒、又以鳴鑼誘衆心而已、是謂兩面錢卜云、將軍譜、無錢卜鳴鑼事、蓋其事出於小説也、この小説は、宋の仁宗の時の名將狄青が事と相類せり、

〔逸史七〕夏四月元○文祿 抵藝造嚴島祠○豐臣 駐師禱之、令左右取錢一緡、祝曰、投而多面、必得志矣、揮手一擲、每錢皆紅、師衆相傳歡呼、大閣大喜、隨納錢于神庫、蓋預粘合二錢、作兩字云、

逸史氏曰、豐公似襲狄青故智、然公之不學、豈知史冊上有是事哉、蓋英雄一時機鋒、偶然有暗合焉、爾亦可以爲一奇矣、

占例

〔類聚國史三十一〕延曆廿五年三月辛巳、天皇○桓崩、癸未、以山城國葛野郡宇太野爲山陵、地西北兩山、有火自焚、丁亥、日赤无光、大井、比叡、小野、栗栖野等山共燒、煙火四滿、京中晝昏、上以爲所定山陵地、近賀茂神、疑是神社致災、火乎、即決卜筮、果有其祟、上曰、初卜山陵、筮從、龜不從也、今災異頻來、可不慎歟、即自禱祈、火災立滅、

〔宇治拾遺物語一〕旅人のやどもとめけるに、大きやかなる家のあばれたるがありけるによりて、こゝにやどし給てんやといへば、女ごゑにて、よきこと、やどり給へといへば、みなおりるにけり、やおほきなれども、人のありげもなし、たゞ女一人ぞあるけはひしける、かくて夜あけにければ、